

※「はらまち九条の会」は、超党派の自由な市民のゆるやかな会で、匿名でもけっこうです。
現在の会員413名。さらに会員を募集中です。年会費千円をお願いしています。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.135

2010(平成22)年 6月 5日(土)発行

<1942(昭和17)年6月5日から7日まで、「ミッドウェー海戦」で日本軍機動部隊が全滅>

チケットの購入・販売、ご入場ありがとうございました 皆様のご協力で 映画「いのちの山河」上映会 好評のうちに終了

▼4月21日付『福島民報』浜通り版。こんなに大きく報道されました。

●映画「いのちの山河」の上映会については、チケットの購入や販売のご協力、お忙しい中のご入場、誠にありがとうございました。

●お陰様で、2月14日(日)朝日座での試写会に80名、3月7日(日)朝日座上映会には310名、5月15日(土)小高区浮舟文化会館上映会には630名、合計1,020名の方が鑑賞され、映画の内容も好評でますます成功の上映会となりました。

■正式に南相馬市上映会開催を決定したのが、新春の1月7日。「はらまち・小高九条の会」の合同主催とし、準備がスタート。

■2月14日(日)朝日座での試写会も、3月7日(日)朝日座上映会も本当に寒い一日でした。

●その間4月24日(土)には「はらまち九条の会総会」と「蓮池透さん講演会」を開催。その準備もそれなりに大変でした。

●3月から間を置き、小高では農繁期を終えた暖かい5月15日、幸い原町の2倍以上の入場者があり、ほぼ満席でした。

主催の「九条の会」事務局員一同、皆様のご協力に対し心より感謝申し上げます。

3回で600人観賞 25条と無医村長の奮闘描く

生命尊重 憲法に学ぶ

小高で「いのちの山河～日本の青空Ⅱ」上映



「いのちの山河」を観賞した来場者

舞台あいさつする大沢監督



日本国憲法を題材にした劇映画「いのちの山河」日本の青空Ⅱ」南相馬市上映会は十五日、同市小高区の浮舟文化会館で開かれた。はらまち、小高両九条の会で行く上映委員会主催。市教委、朝日座を楽しむ会、福島民報社などの後援。映画は大沢豊監督作品。長く無医村だった岩手県旧沢内村で

「いのちの山河」のメガホンを取った大沢監督の舞台あいさつは、十五日の三回の上映開始前にそれぞれ行われた。

「皆さんお久しぶりです」

大沢監督が舞台あいさつ

大沢監督は、日本国憲法の草案要綱を起草した南相馬市(旧小高町)出身の憲法学者・鈴木安蔵を主人公とした前作の「日本の青空」を小高区で撮影しており、「皆さんお久しぶりです」と冒頭あいさつした。今回の撮影が雪との格闘だった苦労話や、前作との関連性などについて語った。

「生命尊重」の理念を掲げ、憲法二十五条を盾に高齢者と乳児の医療費無料化を実現した深沢巖雄村長の奮闘のドラマを描いている。三回の上映で合わせ約六百人が来場し、憲法に思いを巡らせながら観賞していた。

「上映会を終えて」 「いのちの山河」南相馬市上映委員会代表 平田慶肇

この度、原町と小高での映画『いのちの山河（日本の青空Ⅱ）』の上映会に際しましては、多数の方に力強いご支援をいただき、たくさんの方に観て頂き、本当にありがとうございました。お陰様で上映会は好評のうちに終了し、大澤監督にも大変喜んでいただきました。

この映画の主人公深澤村長は、父の遺志とは異なり医師の道には進まず政治の道を選んだのが、あの成功に繋がりました。格差社会の打破のために、県の反対を押し切って、まず老人と乳児の医療費の無料化を全国に先駆けて実施し、更には乳児死亡率ゼロの偉業を成し遂げました。この素晴らしい実行力には大いに感動させられます。当然周囲の人々の大きな協力があったのと思います。この映画は特に政治に携わる人や、それを支える人たちに、もっともっと多くの人に観て欲しかった、というのが私の感想です。

ところで、またまた我が国の首相が変わりました。憲法9条の改悪に向かうかも知れません。ここは皆さんで注意深く見守り、憲法9条を守るために頑張りましょう。



大澤 豊監督、小高上映会でご挨拶・いのちの山河 撮影のエピソードなど



監督・大澤 豊

1935年11月、群馬県高崎市に生まれる。山本薩夫、勅使河原宏、黒澤明監督らの助監督を務め、81年、後藤俊夫監督、神山征二郎監督とこぶしプロダクションを設立。以降、監督、プロデューサーとして活躍する。有限会社こぶしプロダクション代表。

主な作品は、「ガキ大将行進曲」(78)、「ボクちゃんの戦場」(85)第36回ベルリン国際映画祭児童映画部門三賞、「遥かなる甲子園」(90)、「GAMA-月桃の花」(96)、「アイ・ラヴ・ユー」(99)第23回日本アカデミー協会特別賞受賞、「アイ・ラヴ・フレンズ」(01)、「アイ・ラヴ・ピース」(03)、「日本の青空」(07)

監督は、もう次の憲法シリーズ三作目と考えているそうです。

馬にメーキャップ！真冬のシーンを真夏に撮影！

5月15日の小高上映会には大澤豊監督をお招きし、舞台挨拶をいただきました。興味深い撮影の苦労話を披露されました。

▼昔と違い雪が少なく、雪を集めることに苦労しました。そのため経費がかさみ日程も大幅に遅れてしまった。ストーブを囲む真冬の場面を、真夏の8月に撮影することになりました。どてらやセーターを着ての撮影ですから、俳優さんは皆汗を流しながら真っ赤な顔をして、氷のあたりを冷やしながらの撮影で大変でした。



▼馬そりに使う馬がなかなか見つからず、やっと遠野市から1頭借りてくることに。でも1日4、50万円もかかるので、数日分を1日で見せることになり、同じ馬を違う馬のように見せなければなりません。そこでメーキャップを呼んで、同じ馬の額の毛をハート形にしたり、白髪に染めたりしてメーキャップをしました。私も馬にメーキャップなんて初めてでした。



○3年前の『日本の青空』制作でも小高の皆様には大変お世話になり感謝しています。また人情篤い小高を懐かしく感じてやってきました。



鈴木安蔵



深澤 晟雄

▲憲法制定に関わった鈴木安蔵は明治37年生まれで、またその憲法を実現しようとした映画の主人公深澤晟雄は明治38年生まれで、二人は同じ二高（現在の東北大学）に入学して校内のどこかで会っているかも知れないと私は思っています。

○撮影には飢えてやせ細ったり病弱そうな赤ちゃんが欲しいのですが、みな丸々太った健康そうな赤ちゃんばかりで困りました。

◀ 深澤晟雄が死んで雪の峠を越えて沢内村に戻るシーンでは、昭和40年当時の乗用車を5台準備する予定でした。でも3台しか準備できず、その1台もエンコして動かず、結局2台だけになってしまった。しかし史実の場面と同じように激しい吹雪になりましたが、あのシーンだけで8千万円かかったようです。（あの場面は沢内村で撮影。キャストの村人の中には、45年前、実際に亡くなった深澤村長を乗せた車を迎えた経験をもつお年寄りも多く、感動的な撮影になったそうです。）

